
eye-金魚-

美久

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

eye - 金魚 -

【Nコード】

N5092A

【作者名】

美久

【あらすじ】

瞳を集める少女は飢えていた。それは誰もが思春期に抱く想い…
酷い儀式でしか温もりを理解出来ない少女は…

（前書き）

本文に記載される名前や情報は全て偽り、出鱈目な情報です。

砂利道を踏み締める音が背後で止む。演技者さながらに息を吸い込みひつと掠れ声を出す母、私は一点から視線や集中を反らさず背中を向けていた

「ねえ 里緒さん」

大体の会話を読む。右手について聞かれると。
的中した。

「右手に握ってらっしゃる物はなに？」

さあ何でしょうかね。池に左手を突っ込み逃げ急ぐソレから一匹捕まえ水面から出すと抵抗を強め尾で手を叩かれる。

生臭いヌメヌメとした感触を感じ、母が呼吸を止める一瞬と同時に右手に握られたフォークを金魚の眼球へ振り下ろした。

バタバタと体をくねらせ左眼球が抜き取られると力無く鈍い反応をみせた

また池へ戻し血が水に浸透していく様子を眺めた

「これはフォークです」

「ひっ…もう…嫌よ」

汚れたフォークを母へ渡し両手で宝石を部屋まで運ぶ。擦れ違い際母が青冷めた表情で呟く

「化物、悪魔よ…」

私に聞かれてると意識していない声だった。

扉を背中を押し開け、勉強机に置いた瓶の中へ宝石を入れる。

40匹以上の眼球は照明に輝き美しい。

友達がいない寂しいさや家族が解け合えない孤独と退屈を埋める宝石は温かい。

あんた達、大好き。

幼稚園から現小学4年生まで続く儀式に最近 意味がついてこなくなり、歳を重ねるにつれ無になるらしい。意味なんて空虚の言葉だと。

しかし

私が眼球に求める思いは変わらなかった。

夜9時を知らせる振り時計が家中へ響く。扉が叩かれ返事をいうと指二本分開き雇われ家政婦が用件を告げる。

「龍成様がお呼びです」

「ご苦勞様です」

ベットを降り指定された部屋へ向かう。

父は富豪家育ちで社長業も代々からの約束だから働いている。我慢や不都合を学ばず飼育された人間。

悲しい人だ。

和室の扉を開け畳へ足を踏み入れた、父は着物姿に正座という変化のない恰好で中央に座っていた

「帰っていたのですね。それで何か？」

「また約束を」

「はい。気に食わないのです、希望通りの反応がありません」

眉を潜める父に隙を与えず私の希望を承諾させる

「金魚と確かに頼みましたが黄色金と言ったはずです」

「ああ 黄色金」

「高級魚です」

「飼おう、けれど」

頷き返すと父は肩を落とし苦笑した。用件が終わったと受取り部屋を出る

黄色金は金魚の頂点で世界に6匹、値は5000万が相場。私にすれば池に泳がせてしまえば儀式で使い捨てだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5092a/>

eye-金魚-

2010年10月14日18時39分発行